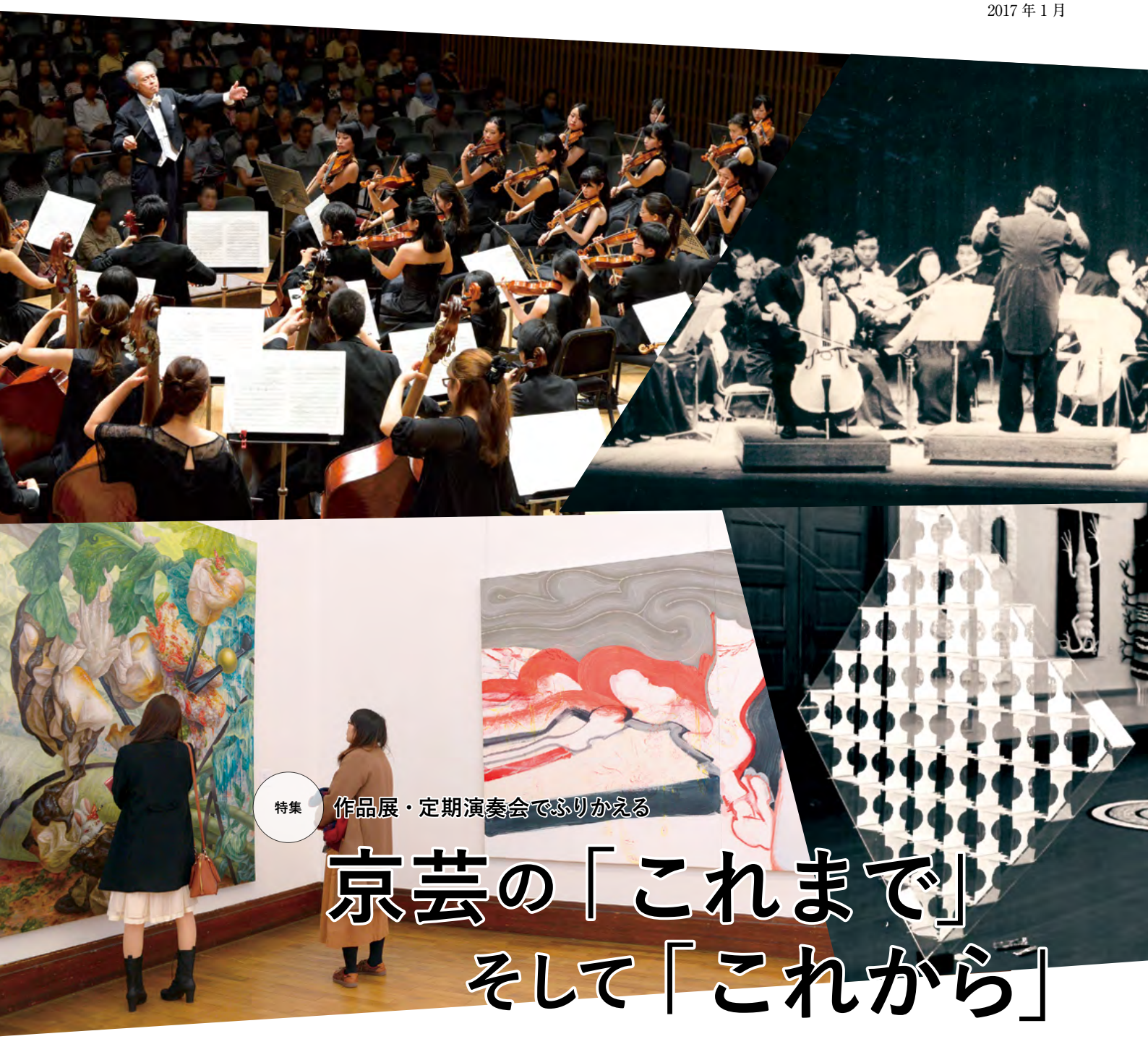
京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts — founded in 1880 —

京芸通信 Kyo-gei Tsushin

Vol.020
京都市立芸術大学広報誌
2017年1月



特集 作品展・定期演奏会でふりかえる

京芸の「これまで」そして「これから」

◉インタビュー

谷原菜摘子さん
北端祥人さん
坂東幸輔講師

◉教員の活動

大嶋義実教授 × **ヤロスラフ・トゥーマ**客員教授
京都・プラハ姉妹都市提携20周年記念コンサート

◉連載企画

京芸で，日本の伝統音楽に触れる／リレーコラム／ゲイシケンだより

特集

作品展・定期演奏会でふりかえる

京芸の「これまで」そして「これから」

京都市立芸術大学は、芸術系大学としては国内で最も長い歴史を有する大学であり、その起源は明治13（1880）年に創設された京都府画学校まで遡ることができます。130余年に及ぶ大学の歴史は、その時々の時代の空気を感じながら作品制作や演奏活動等にそれぞれ心血を注いできた学生たちが刻んできた歴史でもあります。その一方で、公立大学である本学は、自らの教育研究成果を広く社会に還元していくという重要な責務を負っており、学生たちの学びの成果や教職員による研究成果を社会に発信することで、こうした要請に応えてきました。

今回の特集では、京都芸大で学ぶ学生にとって、一年間の教育研究成果の集大成の場である作品展（美術学部・美術研究科）と定期演奏会（音楽学部・音楽研究科）を今一度ふりかえることで、京都芸大のこれまでの歩みを見て行きたいと思います。

1984年度作品展準備の様子

1 作品展

美術学部・美術研究科の作品展は、全学生約700名の作品が一堂に会する場であり、一年間の制作活動の集大成です。

前身の京都府画学校時代から数えて130余年の歴史を有する本学の作品展の歴史は古く、「校友会」の名称で開催されていた明治28年の「生徒作品展覧大会」まで遡ることができます。以来、様々な変遷を経ながら、京都市美術館本館と別館、そして学内を会場に作品を展示する現在の開催形式に至っています。

今年度の作品展の開催を目前に控え、美術学部広報委員長として、作品展を取り仕切る松井紫朗教授が本学における作品展の位置付けや意義、見どころ等を紹介します。

作品展の主な歴史

明治 13 年　京都府画学校創立
明治 28 年　生徒作品第1回展覧大会
昭和 12 年　京都市美術館（当時は大礼記念京都美術館）での作品展示を開始

第二次大戦の激化に伴い，作品展中止

昭和22年　作品展再開（学内）
昭和28年　京都市美術館で美大作品展を開催
昭和45年　京都芸大としての初の作品展開催
平成 7 年　学内展がスタート
平成16年　京都市美術館別館に全専攻1回生の作品展示を開始

昭和30～40年代の作品展ポスター

2011年度作品展の様子（京都市美術館）

2004年度作品展の様子（京都市美術館）

1996年度作品展の様子（京都市美術館）

通常、年度末に日本各地の美術館で行われる美術大学の展覧会と言えば、卒業生・修了生の展覧会です。しかし、学部生から大学院修士課程の全学生が同じ土俵の上で、作品の質を競い合う機会を与えられるのが、「京都市立芸術大学作品展」の特徴です。1970年以前の作品展では、出品に審査がある時期もありましたが、基本的に全校生が参加するというこの制度はずっと変わっていません。これは、在学生にとって、特に下級生にとっては、とても刺激的なことです。今年はあそこにこんなのがあった、あの部屋にこんな変わったのがあったなどと短い会期中、うわさにでもなろうものならそれはまさに大金星！それを目指して意欲的な作品が次々生み出される現場となるのはこの先も変わらない事でしょう。

そして彼らは、時代の空気を吸って制作に臨む若者たちです。敏感に変化をキャッチし作品に取り込みます。シャープな幾何学形態にモノクロームの色彩の作品であふれる時もあれば、有機的な形態にカラフルなイメージが乱立する時もありました。皆さんが今どんな時代に生きているか、一度それを確かめるつもりで御鑑賞ください。

そんな長い歴史を持つ作品展も、様式や表現媒体の変化にあわせ、少しずつ変わってきています。沓掛にある大学内の自分たちの制作室を片付けたり、壁を塗り替えたりしながら展示空間を生み出し、大空間を一人で占めるような展示をしたり、個展形式で何点もの作品を展示するような「学内展」が始まったのは1995年からです。それ以降、美術館での展示と並行して毎年開催されるようになりましたが、実はこれも通常の展示に飽き足りない学生が自主的に始めたものです。当初こそ、美術館からは遠く離れ、観客もまばらでしたが、それぞれの作品の個性を見出しやすいと瞬く間に評判になり、現在はたくさんの観客が訪れる展覧会になっています。

また、これまで長年にわたり会場として使用してきた京都市美術館本館が、2017年4月以降、一時休館となるため、長年慣れ親しんだ現在の美術館での展示は、ひとまず今回で見納めになります。この他、今回は崇仁会場での展示も行います。この機会に是非、作品展会場に足をお運びいただき、学生たちの渾身の作品をご覧ください。

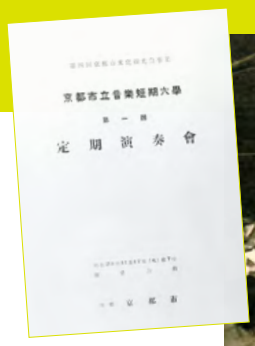
松井紫朗
教授・美術学部広報委員長

2015度作品展の様子（京都市美術館）

2012年度作品展 学内展の様子（大学会館ホール）

2015年度作品展 学内展の様子（アトリエ棟）

2015年度作品展 学内展の様子（彫刻棟）



第1回 定期演奏会
(昭和28年)

2 定期演奏会

音楽学部・音楽研究科の学生たちにとって、学びの成果を披露する最大の舞台が定期演奏会です。前身である京都市立音楽短期大学当時の昭和28年11月に開催された第1回目から数えて150回を超える歴史と伝統を誇る本学の定期演奏会は、京都のみならず関西の学生音楽界にあって常にトップレベルにあり、現在プロの演奏家として活躍する多くの卒業生・修了生たちもこの舞台を踏み、音楽の世界に羽ばたいていきました。

現在、この歴史ある定期演奏会の記録を後世に伝えるべく、現存する演奏音源のデジタル化という一大事業に取り組む山本毅理事・音楽研究科長に、これまでの本学の定期演奏会の歴史を振り返っていただきました。

音楽短大創立15周年記念 第19回 定期演奏会(昭和42年)

定期演奏会によせて

山本 毅(理事・音楽研究科長)

定期演奏会とは演奏団体や音楽大学等の組織が定期的に開催する演奏会である。言葉で定義すればそれだけのことだが、実はその団体にとって定期演奏会というのは大変重要な意味を持っている。

まず第一にそれはその団体にとっての最も重要なコンサートである。その団体が世に対して自身のアイデンティティーを発信する最も良い機会が定期演奏会である。

そして次にそれは定期的・継続的なものだ。一回限りのコンサートなら実態を隠しての演出も可能かもしれないが、定期的・継続的に開催する演奏会では自ずと実態が露わになってしまう。だから、どの団体でも定期演奏会には全力を傾けている。

というわけでその団体の実態を知るには定期演奏会を聴くのが最もよい方法だ。そして定期演奏会の歴史を辿ればその団体の歴史を辿ることができる。その団体が何を目指し、どう歩み、どこに到達し、これからどう歩もうとしているのかが窺い知れるのが定期演奏会だ。

過去60年を超えて積み重ねてきた定期演奏会の歴史を辿れば京都芸大音楽学部・音楽研究科の過去・現在・未来を知ることができるといえるだろう。

ここで少し過去の記録を振り返ってみたい。

1952年に京都市立音楽短期大学として発足した本学音楽学部は、翌年の1953年には既に第1回の定期演奏会を開催している。この演奏会で取り上げられたのはなんとベートーベンの交響曲第二番だ。演奏至難なベートーベンの交響曲の中でも玄人好みの屈指の難曲といえる第二番をあえて第1回に取り上げた当時の教授陣の姿勢には尊敬の念を禁じ得ない。

1956年第6回には当時京響の常任指揮者に招かれたカール・チェリウス氏が指揮者として登場し、創立4年目にして既にヨーロッパからの指導者を迎えている。以降、本学定期演奏会では国外・国内の一流指揮者が指揮台に登ることが全く珍しくなくなった。

1973年第28回、この回から会場が京都会館第一ホールとなった。それまで客席数800の第二ホールで行われていたものを学生、教職員、そして教育後援会の大変な熱意と努力をもって客席数二千余の第一ホールに進出したと、故・岩崎勇教授から伺ったことがある。実際プロのオーケストラが演奏するのと同じホールで演奏するということはプロを目指す音大生たちにとって大変重要な意味がある。以後、第一ホール、そして現在の京都コンサートホールでの開催が常態となり現在に至っている。

2000年第105回、この回演奏したドヴォルザークの交響曲第8番他のプログラムをもって初の海外遠征プラハ公演へ進出した。ドヴォルザークの故国でドヴォルザークを演奏し歓呼の声をもって迎えられたことは、当時の学生たちにとってのみならず今に至るまでの貴重な経験となった。

そして2014年第146回、この回からオペラが定期演奏会のプログラムとして登場してきた。1986年の大学院音楽研究科発足以来、関係諸氏の努力によって成長してきた大学院オペラがついに定期演奏会の一角を占めるまでになったのだ。そして、「音楽学部・大学院定期演奏会」が「音楽学部・大学院音楽研究科定期演奏会」となった。

京都芸大音楽学部・大学院音楽研究科がこれからどういう道を歩んでどこへ向かおうとしているのか。私も定かに知っているわけではない。なぜなら未来を決める主役はやはり未来の学生たちなのだ。しかし、定期演奏会を見つめ続け、聴き続けていけばその先がほのかに見えてくるに違いない。定期演奏会へのご来聴を希う次第である。

第148回 定期演奏会(2014年)

第145回 定期演奏会(2013年)

プラハにて演奏会(2000年)

第150回記念演奏会（平成27年）

第151回 定期演奏会　大学院オペラ公演（平成28年）

定期演奏会の主な歴史

昭和２８年１１月　京都市立音楽短期大学 第１回 定期演奏会 開催
昭和３５年１１月　京都会館で初めての演奏会（第12回）
昭和４４年１１月　京都芸大発足，大学・短大合同による演奏会（第21回）
平成１０年１２月　第100回記念演奏会，卒業生の佐渡裕氏が指揮
平成２１年１２月　創立130周年記念演奏会，卒業生の阪哲朗氏が指揮
平成２３年１１月　桐朋学園との交流演奏会（第139回）
平成２４年１２月　音楽学部創設60周年記念演奏会（第142回）
平成２６年　２月　大学院オペラ公演を定期演奏会に位置付け（第146回）
平成２７年１２月　第150回記念演奏会

第153回 定期演奏会（平成28年）

2017年 作品展・定期演奏会のスケジュール

[入場無料]
問合せ：教務学生課（美術教務担当）075-334-2220

2017年２月８日（水）～12日（日）

京都市立芸術大学 作品展 2016

会場：京都市美術館・京都市立芸術大学・崇仁会場

美術学部及び大学院美術研究科修士課程の学生全員（約700名）による毎年恒例の作品展。第１会場及び第２会場の京都市美術館（本館・別館）では，絵画・彫刻・映像・音響等の様々な分野の作品を一堂に集めて展示し，第３会場の本学構内では，大学の施設を利用した立体作品や平面作品の展示を行います。最終日の2月12日には，14時から京都市美術館本館にてギャラリートークを開催。鷲田清一学長が聞き手となり，市長賞及び大学院市長賞を受賞した作品の作者による解説が行われます。また，今回は本学の移転予定先のJR京都駅東部の崇仁地域においても作品展示がありますので，是非お立ち寄りください。
詳細は本学HPをご参照ください。http://www.kcua.ac.jp/arts/exhibition/

1953年に第１回が開催された伝統ある本学の定期演奏会。京都芸大の力を結集した渾身の大演奏会は必聴！

2017年７月２日（日）14時開演予定

第155回 定期演奏会

会場：京都コンサートホール

曲目：M.ラヴェル「ダフニスとクロエ 第２組曲」ほか

2017年12月11日（月）19時開演予定

第156回 定期演奏会

会場：京都コンサートホール

曲目：J.シベリウス「交響曲第２番ニ長調op.43」ほか

[料金：1,200円（全席自由）]
問合せ：連携推進課（事業推進担当）075-334-2204

教員の活動

2016年にチェコ共和国のプラハ市と京都市が姉妹都市提携を結んで20周年を迎えました。本学音楽学部では、これを記念して、同年11月15日、本学客員教授を務めるヤロスラフ・トゥーマ、プラハ音楽アカデミー教授を招き、公開講座としてコンサートを開催しました。

今回の「教員の活動」は、プラハ放送交響楽団でも長く活躍するなど、同国と深い関わりを持ち、コンサートを企画した大嶋義実音楽学部教授にお話を伺いました。

――今回のコンサートが実現に至った経緯をお聞かせください。

2016年にプラハと京都市が姉妹都市提携20周年の節目を迎えるということで、京都市から何か記念イベントができないだろうかと相談を受けたのが始まりです。当初はヨーロッパに留学中の学生や、在住の卒業生を交えて何かできればという話でしたが、今回お招きしたトゥーマ氏とは30年近くデュオを組んでいることもあり、折角なら二人で演奏してみたら面白いんじゃないかということで、今回の企画に繋がりました。

ヤロスラフ・トゥーマ客員教授（プラハ音楽アカデミー教授）

――コンサートの手応えはいかがでしたか。

知らない作曲家の曲だけれどベートーヴェンやバッハとは違う世界が広がっていて、それが当時の人にも受け入れられていたし、21世紀に生きる我々が聴いても、なるほどいい曲だと思ってもらえたのではないかと思っています。

――チェコとの交流に関して今後取り組まれたいことをお聞かせください。

2017年は私が初めてプラハのオーケストラで演奏

京芸発の主なイベント（2017年1月時点）

2017年2月12日（日）13時開演

日本伝統音楽研究センター第46回公開講座
「長唄の形と道－立誠校で今藤政太郎客員教授にきく－」
会場：元立誠小学校3階自彊室

歌舞伎とともに発達した三味線音楽「長唄」。その歴史と価値を振り返り，京都・日本の音楽文化を展望します。
講師を務める今藤師は，長唄三味線の演奏と作曲の第一人者として，歌舞伎俳優，和・洋の舞踊家，演出家，映画監督等の厚い信頼を受け，多分野で繊細な感性を発揮されてきました。京都市内の立誠校・銅駝校などで過ごした戦争前後の思い出，亡父で囃子方家元の四世藤舎呂船との先斗町での指導，古典の様式論，復曲への取り組みなど，貴重な芸談の数々をお聴かせいただきます。

[受講料：1,000円]
[要申込：2017年2月9日（木）必着]
問合せ：連携推進課（事業推進担当）075-334-2204

2017年3月20日（月・祝）18時開演

京都市立芸術大学音楽学部 平成28年度 卒業演奏会
会場：京都府民ホール・アルティ

音楽学部各専攻から成績優秀者として選ばれた卒業生を代表する実力者が独奏・独唱・作品発表を披露します。未来へ羽ばたいていく卒業生の渾身のステージは，聴衆の心を揺さぶります。京都芸大の教育成果の集大成を是非お聴きください。

[入場無料]
問合せ：連携推進課（事業推進担当）075-334-2204

2017年8月5日（土）～13日（日）

チャリティーオークション「サイレントアクア2017」
会場：ギャラリー@KCUA

本学サテライトギャラリーであるギャラリー@KCUA（アクア）は，本学の教育研究成果を広く発信するとともに，芸術文化創出の人材交流の場となることなどを目指しており，一年を通じて意欲的な企画展等を多数開催しています。
2011年からスタートした「サイレントアクア」は，ギャラリー@KCUAを会場に，年に一度，卒業生や在学生・教員などの本学ゆかりのアーティストの出品による災害復興支援・芸術活動支援のためのチャリティーオークションです。オークション収益の一部は，震災被災地で芸術を通したボランティア活動，支援活動を行っている団体への活動資金として寄付します。

問合せ：連携推進課（附属施設担当）075-334-2231

本学主催イベントの詳細は，京都市内各所で配布中の「京芸イベントガイド」をご覧ください。本学ホームページでもイベント情報を発信中！ http://www.kcua.ac.jp/event/

2016年11月15日（火）開催
京都市立芸術大学 音楽学部 公開講座
おおしまセンセーのおしゃべりコンサート
「ベートーヴェンなんてぶっとばせ！？
ホントはすごい，音楽史を支えた知られざるボヘミアの作曲家たち」
京都コンサートホール アンサンブルホールムラタにて

チェンバロ・フォルテピアノ：ヤロスラフ・トゥーマ
フルート：大嶋義実

大嶋義実教授 × ヤロスラフ・トゥーマ客員教授

京都・プラハ姉妹都市提携20周年記念コンサート

Program

F.ベンダ
「フルートと通奏低音のためのソナタニ長調」
A.レイハ
「フォルテピアノのための36のフーガより」
J.K.ヴァニュハル
「フルートと通奏低音のためのソナタト長調」
V.A ミーチャーJ.トゥーマ
「聖なる愛の迷宮のテーマによるパッサカリア」
A.レイハ
「フルートとフォルテピアノのための
デュオ・コンチェルタンテニ長調op.103」

実は6月にプラハでも記念コンサートを開いたんですが、今回の京都でのコンサートは基本的にはそれを再現したものです。

――今回の演奏は日本では馴染みの薄い楽曲からの選曲でしたが、その狙いはどこにあったのでしょうか。

大学での音楽教育は、どうしてもベートーヴェンやバッハ、モーツアルトのような誰でも知っている音楽家の楽曲を学ぶことが主体になるせいか、学生たちはクラシック音楽の一流の作曲家というのは、ベートーヴェンやバッハであって、彼らを生んだドイツこそがクラシック音楽の本流なんだと思っている節があります。しかし、実際の音楽史を紐解いてみると、ベートーヴェンが活躍した時代というのはチェコ出身の作曲家の方がはるかにヨーロッパでは活躍していたんです。哲学者の鶴見俊輔さんの言葉をお借りすれば「学びほぐし」ということになるかと思いますが、学生たちの凝り固まった頭を少しほぐしてみませんかという想いからの企画でもあるんです。もちろんベートーヴェンやバッハがダメということではなくて、実は西洋音楽の歴史にはこういう広がり方があるんですよということを提示していくことによって、クラシック音楽の未来が見えてくるのではないかという考えが根底にはあります。

――大嶋先生とトゥーマ氏のどちらが発案されたのでしょうか。

どちらということはなく、二人で話す内に自然に決まりました。今回2曲演奏したA. レイハは18世紀生まれの人で、生まれも育ちもプラハなので、まず彼の曲をやりましょうということになりました。そうなるとレイハが出てくるまでのチェコの作曲家も取り上げましょうとなり、今回の選曲になりました。皆、当時ベルリンやウィーンやパリで大活躍していた音楽家たちです。特にレイハは、ベートーヴェンと同級生で共にボンで学んでいた時期もあるんです。彼の曲を京都で演奏するのは初めてのことでしたので良い機会になりました。

――過去の活躍に比して、現在名前が知られていないのは何故でしょうか。

19世紀のヨーロッパ各国における国民国家の成立と深く関わっています。国ごとに民族意識が強くなり、各国独自のアイデンティティを模索する中で、どうしてもその国の出身の音楽家に重きを置く傾向が出てきます。ドイツであればベートーヴェンやバッハだし、フランスであればサン・サーンスやベルリオーズになる。レイハはパリ音楽院教授として優秀な弟子を育て、フランス国籍も取得しますが、ナショナリズムの高まる時代にあってはやはり外国人扱いをされてしまう。音楽史の中では重要な役割を果たしてきたのに歴史の片隅に追いやられてしまった人たちを、もう一度表に出すことが「学びほぐし」に繋がると思っています。

大嶋義実教授

活動を行ってから30周年の節目の年です。30年間、チェコと日本を行き来し続けており、プラハでの活動は私にとってはまさしくライフワークです。これからも日本では知られていないボヘミアの音楽を紹介していきたいですね。

――京都市民の皆さんへのメッセージをお願いします。

市民の皆さんの感覚からすると、芸術大学でクラシック音楽を学ぶというのは、日頃の生活からかけ離れたことのように思われているかもしれません。しかし、クラシックの楽曲には現代人にも伝わるメッセージがあります。実際にコンサート会場で演奏を聴いていただけば、そのことを感じていただけるのではないでしょうか。また、音楽に触れることで、地理的にも時間的にも隔絶した存在（過去のヨーロッパの音楽家）にでも人は共感することができるという、人間の持つ驚くべきコミュニケーション能力を信じるきっかけにしていただければ嬉しいです。

上野の森美術館VOCA展2016
VOCA奨励賞

VOCA 展…全国の美術館学芸員，ジャーナリスト，研究者などに 40 才以下の若手作家の推薦を依頼し，その作家が平面作品の新作を出品するという方式により，全国各地から未知の優れた才能を紹介している。

京芸の
在学生に訊く
INTERVIEW

美術研究科
博士（後期）課程
油画研究領域1回生

たにはらなつこ
谷原菜摘子さん

――VOCA奨励賞おめでとうございます。受賞作品「穢土」ですが、一見すると強烈なインパクトがあります。何を表現しようとされたのでしょうか。

この作品についてですが、近年、国内各地で起きた自然災害の様子を見ている内に、東日本大震災のことを思い出したんです。その当時、母方の祖母が青森に住んでいてライフラインが寸断されたため、私の家に同居することになりました。そして、父方の祖父の家は阪神大震災で全壊していて、直接的ではないにせよ、そうした地震体験を通じて地震に対する恐怖心があるんです。広島で起きた土砂災害や鬼怒川の氾濫などの各地で起きた自然災害は、次第に地震のことを思い起こさせ、その恐怖心からなのか地面が常に歪んで見えるようになりました。

また、海外に目をやると各国でテロが相次ぎ、多くの人命が失われていて、テロのない日本でも常に災害が起きて人命が失われている現状を目の当たりにして、この世は汚染されているのではないかという疑問が強くなっていきました。その時に平安時代中期の僧侶の源信が「往生要集」で著した「厭離穢土 欣求浄土」（仏教用語：汚れた現実世界を離れて極楽浄土を願い求めること）という言葉が頭に浮かび、この世はまさしく「穢土」だと感じたんです。そしてこれを描くことで救いに昇華させようと考えたのが「穢土」という作品です。穢れた場所であっても人はどうしても生きて行かなければなりません。ですから、一番手前の現代の女性は過去に背を向けていますが、汚れや穢れを断ち切って生きる強い意志の象徴として、手は刃物にして表現しています。それがこの画に込めた救いなんです。

――独特の作風ですよね。

自分の夢に出てくるものがモチーフになっているんですが、夢を見るようになったのは中学校時代の転校先で受けた酷いいじめや暴力がトラウマになっていて、それ以降、作品の中では人間に対する「憎悪」などを描いています。自分の中の嫌なことを掘り起こしたり、社会の暗部を知る必要がありますが、描かない方がしんどいですし、描いているときに「生」を実感します。

「穢土」(2015年/第一生命保険株式会社所蔵)

――黒のベルベットに油彩で描かれていますが、この作風はいつからですか。

大学4回生からです。元々は黒い紙に描いていましたが、サイモン・フィッツジェラルド教授（本学油画専攻）からベルベットに描いてみたらどうかとアドバイスいただいたのが始まりです。描いた瞬間に「これだ！」と確信しましたね。ベルベットは表面が起毛しているので描きづらいんですが、試行錯誤している内に自分のものになりました。

最近は赤いベルベットも使いますが、黒とは全く異なる発色ですから使い分けています。

――作品は様々な素材を用いながら、時代感覚や和洋が混在した世界観を表していますが、影響を受けたものなどはあるのでしょうか。

母方の実家が呉服屋でしたから着物には慣れ親しんでいました。色彩を多用したり、ラインストーンやスパンコールといった異素材を集約して使うことが好きなんですが、金箔や金、銀、銅粉等の日本画の画材も使っています。私の画は具象画なので、今でないと表現できない素材を使うことで、例えば過去のシュールレアリスム作品等との差異化を図る狙いがあります。

――今後の活動、取り組みたいことなどをお聞かせください。

一枚の絵で鑑賞者を自分の世界に引きずり込み、自分の世界観を体感させることができるような力強い絵を制作したいです。

谷原菜摘子[たにはら・なつこ]
1989 年埼玉県出身。京都市立芸術大学美術学部，同大学大学院美術研究科修士課程を経て，現在，同大学大学院博士（後期）課程に在学中。主な受賞歴は，第7回絹谷幸二賞（2015 年），VOCA 奨励賞（2016）など。
パブリックコレクション
京都市美術館，株式会社京都銀行，第一生命保険株式会社

出展中の展覧会

「佐藤美術館 25 人の作家たち ～佐藤国際文化育英財団 25 周年記念奨学生選抜～」
2017 年 1 月 10 日［火］－ 3 月 5 日［日］　佐藤美術館（東京都新宿区）にて

京芸の
修了生に訊く
INTERVIEW

音楽研究科 修士課程
器楽専攻（ピアノ）
2012 年度修了生

北端 祥人（きたばた よしと）さん

第6回 仙台国際音楽コンクール 第3位

仙台国際音楽コンクール…仙台市が開府四百年を記念して 2001 年に創設し，3 年毎に行うコンクール。才能ある若い音楽家を輩出することにより，世界の音楽文化の振興及び国際的文化交流の推進に寄与することを目的としている。第1回大会のピアノ部門で3位に入賞したユジャ・ワン（中国）をはじめ世界的に活躍する演奏家を輩出している。

――第6回仙台国際音楽コンクール第3位入賞おめでとうございます。このコンクールに参加を決めたのはどうしてですか。

日本で開催される数少ない国際コンクールですから、参加することで日本の皆さんに私のことを知ってもらうよいチャンスになると考えました。加えて、課題曲に3つの協奏曲を含むのが本コンクールの特徴なのですが、その選曲も私には魅力的でしたし、審査員の顔ぶれも素晴らしい方ばかりでしたから、予選に参加して弾くだけでも十分価値があると考えエントリーしました。

本選に向けては録音審査を通過した時点から、周囲の人にも協力いただきながら周到に準備を積み重ねました。特に、コンクールの一月前に神戸でリサイタルを開いた際には、京芸時代の弦楽専攻の友人たちに出演してもらい協奏曲を奏でました。この時の演奏で得た感覚がコンクール本番に生かされたと感じていますが、3位という成績を収めることが出来たことには自分でも驚いています。応援してくださった方々に結果で報いることが出来て何よりでした。

――以前から多くの賞を受賞されていますが、今回の入賞を機に何か変化はありましたか。

入賞できたことが縁で、今年5月の仙台フィルハーモニー管弦楽団の定期演奏会で演奏させていただけることになりました（活動情報参照）。また、今回の仙台のコンクールは、インターネットで中継・配信されたので、不特定多数の方に自分の演奏を知ってもらうことができました。これはとても貴重な体験でした。

――現在、ベルリンで活動されていますが、京都芸大修了からの経緯をお聞かせください。

学部と修士課程の6年間を京都芸大で学びましたが、修了を機に環境を変えて心機一転したいと思っていました。ドイツ系の音楽が好みでしたので新天地にはドイツかオーストリアを考えていたところ、現在、指導を受けているマルクス・グロー氏が大阪に来ていて、彼の演奏を聴いて大変感銘を受けたんです。私は、その場で彼に教えを乞いたい旨を伝え、渡独して彼が当時教鞭を執っていたハノーファー音楽演劇メディア大学に入学しました。その後ほどなくしてグロー先生が大学を変わられるのに合わせて、私もベルリン芸術大学に移り、現在に至ります。

修士時代に教わった上野真先生とグロー先生の師が共にハンス・ライグラフ氏（故人）で、両師ともやはり同じ系譜を辿られているだけに指導内容にも通じるものがあり、ドイツでの3年間は修士2年間で学んだことを更に発展させることができました。

――現在は主にどのような活動をされていますか。

大学でのレッスンの他、公演活動をしていて、昨年はポーランドやフランスでコンサートに出演しました。フランスでのコンサートは、一昨年のリョン国際ピアノコンクールでセミファイナリストになったことで招聘いただいたものです。

――ドイツでの生活はいかがですか。

音楽に打ち込める環境は素晴らしいですし、私が暮らすベルリンは様々なコンサートが開催されますから、音楽を聴く側としても良い環境にあります。ただ、食事の面だけは少し苦労しています（笑）。

――今後の活動についてお聞かせください。

6月に大学の卒業試験が控えていますが、その後は上位課程である国家演奏家資格コースに進みたいと考えています。私はこの先もずっとドイツに留まり続けるつもりではありませんから、この資格が必ずしも必要ではありませんが、より高いレベルの課程に身を置いて一層の研鑽を積みたいですし、今よりも自由に時間を使えると思いますので、ヨーロッパでの活動も大切にしながら徐々に日本での演奏の機会を増やし、主たる活動拠点を日本に移していけるようにしていくつもりです。

いずれにせよピアニストという職業は演奏活動あってのものですので、これを絶やさないようにしたいと考えています。幸いなことに現在の活動拠点であるドイツでコンサートの企画も複数動いていますし、日本でも仙台フィルの演奏会など、いくつかの仕事が控えていますので、演奏を聴きに来てくださったお客様との間でコミュニケーションを取りながら現場で成長したいと思っています。

そのためにも、今は学生という身分を最大限に生かしながら、与えられた時間の中で練習を重ねることで力を蓄えると同時に、これまで出会った人たちとのご縁を大切にしながら活動していきたいと考えています。

――京芸通信の読者の皆さんにメッセージをお願いします。

私にとって京都は学生時代にお世話になった思い出の場所です。恩返しというと少し大袈裟かもしれませんが、いつの日か演奏という形で、京都の人たちに「北端は頑張っています」というメッセージをお伝えしたいです。そしてコンサートにお越しいただいた方には、演奏だけではなく人間性も含めて私のことを知っていただけたら幸いです。

北端祥人［きたばた・よしと］
大阪府出身。5才よりピアノを始める。京都市立芸術大学，同大学院修士課程音楽研究科を首席で修了。音楽学部賞，大学院市長賞を受賞。 その後渡独し，ハノーファー音楽演劇メディア大学を経て，現在はベルリン芸術大学に在籍し，マルクス・グロー教授の下で研鑽を積みながら，日本・ヨーロッパを中心に演奏活動を行なっている。 日本ショパンピアノコンクール 2010 第3位，第 7 回神戸芸術センター記念ピアノコンクール金賞，第6回仙台国際音楽コンクール第3位をはじめ，数多くの賞を受賞している。これまでに佐々木弘美，大川恵未，椋木裕子，上野真の各氏に師事。秋篠ユングムジカ第9期生。日本ショパン協会正会員。

活動情報
－仙台フィルハーモニー管弦楽団 第 309 回定期演奏会－
2017 年 5 月 19 日［金］，20 日［土］ 日立システムズホール仙台にて

2016年9月10日～10月2日にギャラリー@KCUAにて開催した「ニュイ・ブランシュ」関連企画「NEW LIFESTYLE」展の会場にて。坂東講師も本学学生とともに作品制作に参加。

京芸の
先生に訊く
INTERVIEW

美術学部
環境デザイン専攻
ばんどうこうすけ
坂東幸輔
講師

建築家として徳島県内で「空き家再生プロジェクト」に取り組み，その活動が評価され主宰する建築家ユニットBUSの一員として第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展（2016）日本館の出展作家に選出されるなど一連の活動が注目を集めている坂東幸輔講師に，京都芸大の印象やご自身の活動を中心にお話を伺いました。

坂東幸輔［ばんどう・こうすけ］
京都市立芸術大学講師／坂東幸輔建築設計事務所主宰。1979年徳島県生まれ。2002年東京藝術大学美術学部建築学科卒業。2008年ハーバード大学大学院デザインスクール修了。スキーマ建築計画，東京藝術大学美術学部建築科教育研究助手を経て，2010年坂東幸輔建築設計事務所設立。京都工芸繊維大学非常勤講師。徳島県神山町，牟岐町出羽島など日本全国で「空き家再生まちづくり」の活動を行っている。主宰する建築家ユニットBUSが第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展（2016）日本館展示に出展。

――京都芸大に着任された経緯をお聞かせください。

数年前から徳島県の神山町をはじめ各地で空き家再生のプロジェクトに関わっているのですが、拠点としていた東京の他に関西にも足場となる場所があれば、より活動の場を広げられるのではないかと考えていました。加えて、以前に東京藝大の助手を務めている頃から過疎地域でのワークショップを手掛けていて、大学を辞めた後も関わっていたんですが、大学教員の立場で関与した方が活動の幅を広げることが出来るのではないかと感じていました。そんな矢先に京都芸大の教員募集の公募を見つけ、手を挙げてみたんです。

――京都芸大の学生達の印象や教育環境をどのように感じられていますか。

教育面では出身の東京藝大との違いに戸惑いました。例えば、東京藝大は専攻は縦割りでそれぞれに専門性を追求する傾向が強く、他専攻の授業を受けることも少ないのですが、京都芸大はその逆で、入ってすぐに総合基礎演習のように皆で授業を受けたり、横の繋がりを作る点を重視しています。また、デザイン基礎の授業にはビジュアルやプロダクトを希望する学生もいるので、どうしたら彼らに空間や環境のデザインを楽しく感じてもらえるだろうかと腐心しています。

京都芸大の学生はとても手が動く印象があります。ただ、みんな考えてしまうことが多いみたいで、手を動かし始めるまでに時間を要する面はあります。芸術系大学全般にその傾向はありますが他大学よりも少しのんびりかもしれません（笑）。

――京都の街に住まれてみた印象はいかがですか。

元々、古い建物が好きなので町家建築等を目にする機会が多いことは楽しいです。街全体が独自の小さい文化を大切にしている感じがしますし、東京や大阪に比べるとコンパクトにまとまっているのもいいですね。

――建築の道を志したのはいつですか。

美大進学を考えたのは高校時代のことで、2年生の時に建築科に進むことを決めました。その当時、建築家の坂茂さんが手掛けたルワンダの難民向けの紙管製の仮設テントの建築を知り、建築が人助けも出来ることに大きな衝撃を受けました。

――転機といえる体験等はありますか。

2008年のハーバード大学卒業のタイミングでリーマンショックが発生し、その煽りを受けて1年近く職に就けませんでした。技術はあるのに仕事がないというのは辛い経験でしたが、そのことを通して自分の力でやれることをやっていこうと考えるようになりました。そして、この時期に徳島県の神山町に出会いました。仕事が見つからないなら、まずはアーティスト・イン・レジデンスで作品を制作して認められてから建築家になる方法もあるのではと思い、帰国時にレジデンス作家を募集していた神山町を訪ねたところ、地域のまちづくりの中核であるNPO法人グリーンバレーの大南代表とお会いして意気投合し、数年後に空き家再生に一緒に取り組むことになり、そこで自分の初めての作品を手掛けることになりました。

徳島県牟岐町出羽島の空き家を再生した〈波止の家〉

――2016年のヴェネチア・ビエンナーレに参加されましたが、海外での反響や手応えはいかがでしたか。

シンガポール大統領がお越しになり、神山町の古民家再生プロジェクトの映像を熱心にご覧になっていましたが、過疎地域に高速インターネット環境が整備されていることに関心を示されていました。有名建築家も多く来場しましたが、リーマンショック後になんとか掴んだ小さな仕事が、こうして世界の人に興味を持ってもらえるプロジェクトになったことに驚くと同時に感動しました。

――大学移転に対して建築家という立場から、どのような期待をお持ちでしょうか。

京都芸大の先生方は、学生たちが自由で自発的に振る舞える場づくりに責任を持とうと考えていて、ユーザーの立場から建築に対して強いこだわりを持って検討に臨んでいます。

自分も含めて若い建築家は、プロポーザルの要件が厳しかったり、公共建築自体が減少しているため大規模建築を手掛けるチャンスに恵まれていません。今回は先生方も若手の建築家を入れたいという思いがありますから、建築家の選定方法も新しいものになると思いますし、5万5千㎡という非常に大きな案件ですから、色々な意味で日本の建築界にとって明るい話題になるのではと期待しています。私自身にとっても、作る側の立場で関われることはとても勉強になります。

徳島県神山町の空き家をIT企業のオフィスに再生した〈えんがわオフィス〉

――今後の活動、取り組みたいことなどをお聞かせください。

これまでから空き家再生などの社会的な活動に取り組んできましたが、最近は公営住宅や障害者の方向けの施設づくりなどの福祉的な仕事に関わる機会が増えました。今後は日本が直面する高齢化や貧困等の社会的課題に向き合わざるをえないと感じていて、そうした中で自分が何をできるかを考えていきたいと思っています。

それから、戦後に日本全国で建設されたモダニズム建築のような地域のシンボルになるような建築の再生にも興味があります。

――京都芸大の学生や大学を応援してくださる皆さんへのメッセージをお願いします。

学生の皆さんは、大学にいる4年間は自分の本当に好きと思えるものを素直にやれる時間ですから、好きなことを見つけて取り組んでもらいたいです。

京都の皆さんには京都芸大の教員であることを伝えると、本当によくしていただき感謝していますし、大学が地域で愛されていることを感じます。引き続き応援をよろしくお願いします。

京芸で、日本の伝統音楽に触れる。

vol.06

保存修復専攻とともに 音楽研究の原点をつくる

竹内 有一（たけうち ゆういち）
京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター 准教授

解体作業中の宇野教授

二〇一五年のある日、東京の常磐津節家元から知らせを受けた。江戸期出版の浄瑠璃本（正本）が家から出てきたという。拝見に伺い、びっくり仰天。新出とおぼしい初演本、世界に一点しかないはずの本がちらほら。感動とともに、深刻な現状に胸が痛む。虫喰いによる損傷（虫損）が甚だしく、本を開くことすら、ままならないのであった。

常磐津節は、延享四年（一七四七）に京都出身の文字太夫が江戸で創流し、歌舞伎音楽として発達。国の重要無形文化財に認定される一方、今なお歌舞伎での演奏や稽古事として親しまれている。

江戸歌舞伎では、常磐津節の演目が毎年、数曲ずつ作られ、その都度、歌詞と音楽的情報を版刻した正本が発行された。つまり、正本（とくに初演本）は、演奏と伝承のルーツを示す起点であり、学術研究の土台となる最重要資料である。常磐津節の正本は、資料館・図書館等に数万点が所蔵されるが、初演本の多くは散逸し、全体の一割に満たない。しかし、今回の新出本は、予備調査により、そのほとんどが初演本であること、その約七割が世界に一点しかない稀覯本であることが判明した。家元に所蔵された由緒を示す痕跡も確認できる。世紀の大発見だ。

これらの正本を活用すれば、演奏伝承、音楽芸能の歴史研究に様々な成果がもたらされる。初演時の歌詞の校訂と音楽的情報の精査により、楽曲伝承の経緯の検証、廃絶した演目の調査研究や復元的演奏などが可能となる。演奏者の記名の考証により、音楽史に新たな一ページが加えられる。挿絵から初演の衣装や振付を考察するなど、歌舞伎の演出研究の資料としても貴重だ。

まずは、虫損の補修が必須。その上で、百年後、千年後への良好な保全を果たさねばならない。京都には古文書修復に長けた工房がある。いや、その前に、学内にその専門家がいらっしゃる。ということで、大学院美術研究科保存修復専攻の宇野茂男教授に相談に伺った。伝音センターの研究活動と保存修復専攻が共同でことを成した前例はない。それでも、史料の現状と学術的価値、教育的効果に鑑み、共同での研究の着手に、多忙な宇野先生が承諾してくださった。

残念ながら初年度の科研費申請は不採択だったが（現在、再申請中）、本学教員の温かい理解により「京都市立芸術大学特別研究助成」を受けた。所蔵者の常磐津家元後嗣、常磐津小文字太夫師も、史料の保全と活用の意義を十二分に理解され、調査研究の一員に加わってくださった。

修復作業は、本の重さ・紙の厚さ・寸法・虫損の程度など、史料の点検と計測から始まった。そして製本を解体、ピンセットと刷毛で一枚ずつ、ゴミや虫の死骸をクリーニング。墨のにじみのチェックも。その後、全紙面を撮影しデジタル化、画像の整理。書誌データベースの作成と、書き込まれた文字の解読考証にも着手。

虫損の繕いは、紙数が大量のため、全面の裏打ちを採用。裏打ちは、保存修復専攻の皆さんにより手早く確実に進められた。史料と作業の特性を踏まえ、独自の手法も柔軟に加えられた。

今後、もっと損傷の著しい史料の補修にかかり、二〇一九年度までに全八巻（約一二〇曲）、約五百丁もの補修を含む調査研究を目指している。保存修復専攻と伝音研究員の共同により、解体した史料をつぶさに実見したために判明した新事実も、いくつか浮かび上がってきている。貴重な史料を介した御縁に感謝し、気を引き締めて、この仕事に従事していきたい。

（常磐津節流祖の出身地、京都寺町にて）

文政6年(1823)11月江戸河原崎座「初深雪花の袖笠」の初演本。いがや勘右衛門版。虫損は軽微。流儀の節目を意識し，「小文字太夫元服ノ浄るリ」と書き込まれる。右下の捺印「常磐津家元」がその由緒を示す。本曲の詞章を記す史料は，世界中にこの1点のみ。

クリーニング作業。虫の死骸や粉状のフンと格闘。

Relay Column
リレーコラム
no.6

ゾンビは少しだけ生き生きとしている。

――現代美術の保存とアーカイブ

石原 友明（いしはら ともあき）
美術学部教授
芸術資源研究センター所長

「芸術は死んだ」
これまで幾度となく繰り返し使われてきたフレーズです。

なぜか芸術、作品はこのように「生き物」というか「人間」のからだに例えたくなってしまうもののようです。この話はそんな「例え」「比喩」を連鎖させ勝手に広げてゆく妄想のようなものです。

テオドール・W・アドルノは「ヴァレリー・プルースト・美術館」の中で「美術館は芸術の墓場である」と言っています。

アドルノの言うように美術館を墓場だとするなら、そこに集められる作品は、すべて死体なのだと言うこともできるでしょう。

一方、「墓場としての美術館」ならぬ「美術館のような墓」があります。有名なレーニン廟、レーニンの墓がそれです。レーニン廟では1924年以来レーニンの遺体を修復保存し続けています。（遺体の保存修復技術のことをエンバーミング(embalming)というそうです。土葬の習慣がある国、特にアメリカ南部では葬儀の後エンバーミングの後土葬されることが一般的だそうです。）見方によってはレーニン廟というのは旧社会主義国における究極の美術館であったというふうにいうこともできます。ここでレーニンは傷むことのないよう、腐敗のおこることがないように数年に一度の処理で「まるで眠っているかのように」修復保存され続けてはいますが、起き上がって動きだすことは決してありません。

石原友明作品「I,S,M,-corpus 16-01」2016

ところで、私は美術作品の制作をしてきたのですが、30年以上前、私がなんとなく作品めいたものを制作し始めた頃、既に「芸術は死んだ」と何度となく聞かされたものです。つまり自分が作り始めたばかりのものは、既に過去のものだと言われていた訳です。

「お前はもう死んでいる。」

まるで秘孔を突かれたその他大勢の悪役です。せっかく美術を始めたばかりなのに、先輩達の話では「私はもう死んでいる」らしい、今更そんなことを言われても…。だとすれば、もう死んでいることはデフォルトで、死んでいる前提で作り始めるしかない。死んでいるのに活動を続ける、いわばゾンビのような芸術、もしかすると、それが現代の多くの美術家たちが生産し続けている作品の群れです。作品が死体であろうとなかろうと芸術の制作は綿々と続けられてゆくものなのです。

では、どのようにして、私たちは芸術の死体に息吹を吹き込もうとしてきたのでしょう？それについての制作する側からの答えは、作品を美術以外の生きた外部世界とあたらしく関係づけることです。その時々の生きた社会、場所、新しい技術と関係を作ることでなんとか「生き生き（とした状態）」の再生を試みてきたのが今日の芸術作品です。

そのような作品たちを、かつて「墓場」と呼ばれた美術館に場を移して「生き生き」とした状態を保ってゆくことなどできるのでしょうか？

実は、今日において現代美術における保存修復の問題とは、生きているか、死んでいるか、という二元論的なものではなく、どちらでもない中間的な状態やその「生き生き」の程度をどのように作り出すかという繊細な問題なのです。

そのような作品＝死体のあり方に、アーカイブ的なもの（＝記憶としての2次資料）のはたす役割が重要になってきています。ここで問題になっているのは、残されたからだと、残された記憶の関係です。もはやどちらかだけでは生き生きとした関係を観客と切り結ぶことはできません。「記憶を持ったゾンビ」そういう状態をつくることが物理的に作品を修理し続けることと以上に重要な気がしています。そこに今日の美術でアーカイブ的なものに注目が集まる理由があります。

幸か不幸か「芸術はそう簡単には死なせてはもらえない」のです。

国立国際美術館でのシンポジウム
「過去の現在の未来―アーティスト、学芸員、研究者が考える現代美術の保存と修復」

本原稿は2015年12月5日に国立国際美術館でのシンポジウム「過去の現在の未来」での講演をもとに書き直したものです。

芸術研 GEISHIKEN

ゲイシケンだより

No.03

新たな飛躍に向けて

「デラシネ――根無しの記憶たち」展で展示中の写真

平成26年4月に発足した京都市立芸術大学芸術資源研究センターは、美術学部、音楽学部、日本伝統音楽研究センター、附属図書館、芸術資料館という五つの学内機関を横断的につなぐプラットホームの役割を担う調査・研究機関として、本学や京都に受け継がれ、日々新たに誕生する芸術作品や各種資料を「芸術資源」としてアーカイブの視点から包括的に捉え直し、新たな芸術創造につなげることを目的に活動しています。

センターでは、開設以来、アーカイブ理論の研究、資料体の調査収集と活用、アーカイブの教育の場での活用という基礎的研究をはじめ、多種の重点研究を推進しています。

昨年度までに9つの重点研究に着手していましたが、28年度からは、「美術教科書コレクションアーカイブ作成」と、本学美術学部独自の教育カリキュラムであるテーマ演習の開講科目である「奥行きの感覚」の変遷を記録する「奥行の感覚アーカイブ」が新たに加わりました。

また、特別招聘研究員の充実を図り、学内外に向けたアーカイブについてのシンポジウム・講演会・ワークショップ・研究会や、他機関との共催事業にも積極的に取り組んでいます。今年度は京都市立芸術大学移転プレ事業の一環として、28年11月から約2箇月間にわたり、本学が35年を目途に移転を予定しているJR京都駅の東側、崇仁地域に建つ柳原銀行記念資料館を会場にした展覧会「デラシネ――根無しの記憶たち」を開催しました。

柳原銀行記念資料館は、平成9年の開館以来、地域の歴史、文化、生活資料を収集・展示してきました。その所蔵資料の中には数多くの写真資料があり、本展覧会では、史料的価値を見出し難いものとしてこれまで人目に触れてこなかった地域の人々の何気ない日常を写したとりとめのない写真や記念写真などに光を当て、「歴史」の中に決して登場することのない、こうした写真に新たな生を与える場を作り上げるという創造的取組を行いました。

この他にも外部資金を活用した事業として27年度に取り組んだ文化庁メディア芸術連携促進事業「タイムベースト・メディアを用いた美術作品の修復／保存に関するモデル事業」により、ダムタイプオフィスや国立国際美術館と連携して修復した古橋悌二《LOVERS―永遠の恋人たち―》を京都芸術センターと共同で展示した他、関連イベントを実施しました。また、28年度は、27年度の実績を踏まえ、文化庁メディア芸術連携促進事業「タイムベースト・メディアを用いた美術作品の修復・保存・記録のためのガイド作成」を受託し、前年度に引き続き、現代美術作品の修復と保存に関する先駆的な研究を進めています。

これらさまざまな活動をとおして活動の輪は着実に広がってきています。今後も、このようなシンポジウムや研究会、学内外の組織との共催事業を地道に重ね、成果を本学の教育や研究に活かすことはもとより、学内外の研究者や市民の皆様とも連携し、アーカイブをとおした新たな創造にチャレンジしていきたいと考えています。

古橋悌二《LOVERS / 永遠の恋人たち》トークイベント

第13回アーカイブ研究会：川俣正氏
「インターローカルなアーカイブの可能性」

第14回アーカイブ研究会：木村友紀氏
「ものが要請するとき加速する」

平成 28 年度 芸術資源研究センター主催の主な事業

開催日	事業内容	講師・パネリスト等（敬称略）
7月9日（土）～7月24日（日）	古橋悌二《LOVERS/永遠の恋人たち》作品展示及び修復資料等の展示（京都芸術センターとの共催）	
7月18日（月）	古橋悌二《LOVERS/永遠の恋人たち》トークイベント（京都芸術センターとの共催）	石原友明（芸術資源研究センター所長） 石谷治寛（芸術資源研究センター研究員） 高谷史郎（アーティスト/ダムタイプ） ファシリテーター：建畠 晢（客員教授）ほか
7月22日（金）	第13回アーカイブ研究会「インターローカルなアーカイブの可能性」	川俣 正（パリ国立高等芸術学院教授）
10月27日（木）	第14回アーカイブ研究会「ものが要請するとき加速する」	木村友紀（美術家）
11月12日（土）～29年1月22日（日）	Sujin Memory Bank Project #01「デラシネ――根無しの記憶たち」（柳原銀行記念資料館との共催）	企画：林田新（芸術資源研究センター研究員） 髙橋耕平（美術家）
11月30日（水）	第15回アーカイブ研究会「アール・ブラウン音楽財団 －理念、記録、プロジェクトとアクティビティー」	トーマス・フィヒター（アール・ブラウン音楽財団（EBMF）ディレクター）
12月8日（木）	特別授業「壁画は何をうつすのか ―法隆寺金堂壁画の模写を通して―」	彬子女王殿下（客員教授・特別招聘研究員）
29年2月26日（日）	レクチャーコンサート「五線譜に書けない音の世界 ～声明からケージ, フルクサスまで～」	レクチャー：藤田隆則（芸術資源研究センター副所長） 竹内直（芸術資源研究センター研究員） ギャラリートーク：塩見允枝子（特別招聘研究員）

京芸，一年間の出来事

News 2016-2017

平成28年4月に3名の教員が着任

平成28年度に、美術学部に永守伸年講師（共通教育）が、音楽学部に久保和範准教授（声楽）、池上健一郎講師（音楽学）が着任しました。

池上 健一郎　講師

久保 和範　准教授

永守 伸年　講師

2017年3月24日（金）

プロフェッサーコンサート
久保和範バリトンリサイタル

昨年12月の第153回定期演奏会でも迫力ある歌声を披露した久保和範准教授が出演。前半は日本歌曲を，後半は有名なオペラアリアをお楽しみいただけます。

会場：京都府立府民ホール・アルティ
時間：19時開演（18時30分開場）
料金：500円（全席自由・未就学児童のご入場はご遠慮ください）

<第1部>
滝廉太郎「荒城の月」，貴志紘一「かごかき」他
<第2部>
W.A.モーツァルト／オペラ≪フィガロの結婚≫より「もう飛ぶまいぞこの蝶々」，オペラ≪ドン・ジョヴァンニ≫より「カタログの歌」他

平成29年3月末に3名の教員が退任

美術学部のひろいのぶこ教授（染織）、高橋成子教授（共通教育）、音楽学部の増井信貴教授（指揮）が、平成29年3月末で退任となります。

各分野で精力的に活動されるとともに、本学の教育発展に御尽力されたことに感謝し、今後もますますの御活躍をお祈りします。

増井 信貴　教授

高橋 成子　教授

ひろい のぶこ　教授

2017年3月11日（土）～26日（日）

京都市立芸術大学退任記念
旅する布たち
－ひろいのぶこ展－

羊毛や絹などの繊維を中心に，紙や金属，貝なども用いた平面や立体，インスタレーション作品を中心に，ひろい教授が国内外の織物の原風景を訪ねて出会った染織品や素材などの資料も展示します。会期中には，会場でギャラリートークの開催も予定しています。※詳細は，ギャラリー@KCUAホームページ（http://gallery.kcua.ac.jp/）をご覧ください。

「SPAN」（2004）

会場：京都府立芸術大学ギャラリー@KCUA（アクア）
開館時間：11時～19時
月曜日休館（月曜日が休日の場合，翌火曜日）
料金：無料

京都市立芸術大学移転整備基本計画（案）が発表

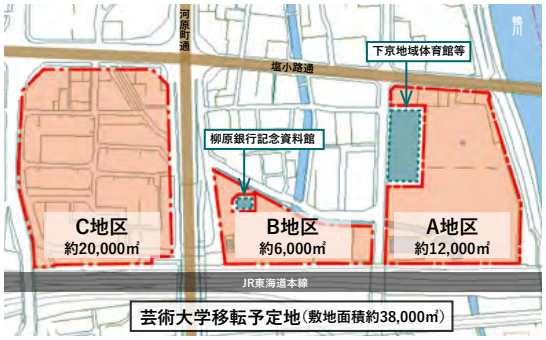
本学では平成35年度を目途にJR京都駅東部エリアに移転することとしています。

そのため、平成27年3月に「京都市立芸術大学移転整備基本構想」を策定し、その後、京都市と本学で移転に向けた更なる検討を進めた結果、「京都市立芸術大学移転整備基本計画」（案）が、この度、京都市から発表されました。

基本計画（案）は、京都市と本学が様々な議論を積み重ねた結果、取りまとめられたもので、本学が自ら策定した移転に関する基本コンセプトの他、新キャンパス整備の重点項目や整備内容等が示されています。

今後、市民意見の募集を経て正式に策定された後、この基本計画に基づき、設計者の選定、設計、工事等、移転整備が進められる予定です。

また、本学では移転整備完了までの期間を有効に活用し、下京区をはじめとする地域で様々な活動を行うことで、移転の機運を高めていこうと、移転整備プレ事業を実施しています。3月25日には、レクチャーコンサートを予定しています。



2017年3月25日（土）　移転整備プレ事業

日本伝統音楽研究センター　レクチャーコンサート
“芸術歌曲”の誕生と音楽の近代

植民地近代と呼ばれた20世紀初頭に東アジア諸地域（日本・台湾・韓国・中国）とオーストラリアで芽吹いた“芸術歌曲”を取り上げます。同地域とオーストラリア，そして国境を越えて活動した作曲家たちが20世紀前半に創作した“芸術歌曲”を，現代の各国の歌手が歌います。

会場：京都府立府民ホール・アルティ
時間：17時30分開演（17時開場）
料金：一般2,000円／学生1,000円（全席自由）

「平成東寺伝説絵巻」部分 蓮華門より

「平成東寺伝説絵巻」を東寺で展示

大学院美術研究科保存修復専攻の宇野茂男教授の指導により、本学をはじめとする7名の学生が制作した「平成東寺伝説絵巻」が、10月28日～12月4日にかけて東寺灌頂院で展示されました。

この絵巻は、大学コンソーシアム京都が、単位互換参加約50大学の学生向けに開設した世界遺産PBL（Project Based Learning）科目の一講座として、平成27年度に開講した『保存科学入門「東寺」絵巻を作る』において、本学の学生4名をはじめ他大学の学生も含めた総勢7名の学生たちが、宇野茂男教授の指導の下に制作したオリジナルのもので、制作に当たり協力いただいた東寺の御厚意により、同寺灌頂院の特別公開に合わせて展示いただきました。

全長16mの絵巻には、東寺の創建時から安土桃山時代までの4つのエピソードが描かれており、海外からの参観者にも内容を理解いただけるよう、日本語だけではなく英語、中国語、ハングル文字の4箇国語の詞書が付けられています。

ノースフロリダ大学との交流演奏会を開催

11月23日に、本学移転プレ事業の一環として、音楽学部・音楽研究科が30年以上にわたり交流を図っている米国ノースフロリダ大学との交流演奏会を堀川音楽高校音楽ホールにて開催し、約250名の市民の皆様に御来場いただきました。

今回の演奏会には、ノースフロリダ大学からピアニストであり作曲家としても活躍するゲアリー・スマート教授（本学客員教授）をはじめ3名の教員を招き、本学から参加した大嶋義実音楽学部長、山本毅音楽研究科長をはじめとする教員及びプロとして活躍する卒業生たちが協演しました。

洛西ニュータウン市営住宅の改修事業に環境デザイン専攻の坂東講師と学生が協力

京都市が取り組む市営住宅のリノベーション事業に、美術学部環境デザイン専攻の坂東幸輔講師と大学院美術研究科環境デザイン研究室の学生たちが協力しました。

「親にとって子育てしやすく、子どもにとっても暮らしやすい住宅」などをテーマに、市営住宅を子育てしやすい間取り等にリノベーションする今回の事業において、洛西ニュータウン内の市営住宅のリノベーションコンセプトや住戸プランを、坂東講師と大学院修士課程の学生が提案しました。

学生たちが提案した住戸プラン3案は、京都市や施工業者との協議を経て、実用性を高めた上で整備が進められることになり、現在、洛西ニュータウンの40戸の住戸で改修工事が行われています。（入居申込は終了しています。）

12月6日には、改修案を考案した大学院修士課程デザイン専攻1回生の学生が門川京都市長と面談し、模型やパネルを使って説明を行いました。

学長室にて学生による自主コンサート「ムジカジカン」を開催中

本誌第19号（平成28年3月発行）で、学長室の西側壁面全体に色鮮やかなフレスコ画が描かれた話題をご紹介しましたが、この学長室において、昨年4月から音楽学部・大学院研究科の学生有志によるミニコンサート企画「ムジカジカン」が行われています。このコンサートは、昼休みを利用して開催されているもので、出演者の人選や選曲はもとより、演奏当日の運営に至るまで学生たちが自主的に企画しており、これまでにフルートとクラリネットの合奏やヴァイオリン・デュオなど様々な楽器による演奏が披露され、学内の昼のひと時に彩りを添えています。

京都市立芸術大学 広報誌「京芸通信」Vol. 020　2017年1月発行　〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6　TEL⇨075-334-2200(代表)FAX⇨075-332-0709(代表)URL⇨http://www.kcua.ac.jp/　Facebook⇨https://www.facebook.com/kcua.ac.jp　Twitter⇨https://twitter.com/kyoto_geidai

京芸からのおしらせ

Information

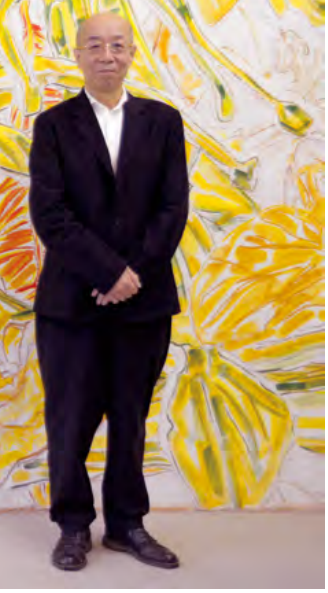
皆様からの御支援をお願いします。

京都芸大では，学生活動や教育研究等の充実を図るため，広く一般の皆様からの御支援をお願いしております。

現在，学生活動や教育研究等の充実を目的とする**「京芸友の会」**制度により，多くの皆様から御支援をいただいております他，主として地元の老舗企業の皆様から複数年にわたる息の長い御支援・御協力をいただくため，2016年度から新たに**「未来の芸術家支援 のれん百人衆」**制度を立ち上げたところです。趣旨を御理解の上，是非とも御協力をいただきますよう，お願い申し上げます。

御寄付をいただいた方は，手続きを行うことで税控除や損金算入の措置が受けられる場合があります。（詳細は大学ホームページを御覧ください。）

この他，2023年度に予定しております新キャンパスへの移転に備え，大学移転整備に向けた寄付金も募集してまいります。



学長　鷲田清一

Contributors

御寄付をいただきました皆様への感謝の意を込め，お名前を掲載させていただきます。（敬称略・五十音順）

《京芸友の会》への御寄付

公益財団法人 永守財団
西尾商事有限会社
ローム株式会社

《未来の芸術家支援 のれん百人衆》への御寄付

株式会社一澤信三郎帆布
巖本 博
永樂善五郎
株式会社大垣書店
京都みなみ会館
ジーケー・ジャパン・エージェンシー株式会社
医療法人知音会
西陣織工業組合
株式会社西利
長谷ビルディンググループ
畑 正高
服部重彦
株式会社細尾
渡辺 孝史

※2016年1月から12月末までに御寄付をいただいた皆様のうち，公表に同意いただいた方のみ記載（京芸友の会への寄付者は法人・団体のみ記載）

ご支援いただき，ありがとうございました。

京都芸大の寄付メニュー

京芸友の会

目的	学生活動や教育研究等の充実
募集対象	個人・法人（団体）
受入単位	1口：2千円
主な使途	学生及び卒業生等の芸術活動支援，学生活動の支援など
特典＊	本学主催の定期演奏会への御招待 オリジナルカードの贈呈

＊5口（1万円）以上の寄付者に限る

図書館に設置する本を学生自らが選ぶ「選書ツアー」の様子

未来の芸術家支援 のれん百人衆

目的	教育研究等の充実
募集対象	地元の老舗企業等
受入単位	1口：30万円×5年 ※
主な使途	機材や楽器の購入，演奏会の支援など

※1口当りの金額・年数については御相談ください。

寄付に関するお問合せ先：総務広報課（電話 075-334-2200）